

2022年度香川県・東京藝術大学連携事業

瀬戸内海分校プロジェクト 第1回

海は人を愛する「さと⇄うみ」展

Project Archive

香川県知事挨拶

池田豊人

香川県では、平成13年度から東京藝術大学との連携のもと、文化芸術に親しむ機会を県民の皆様を提供するとともに、地域の活性化につなげるため、現代美術のアーティストの制作活動に触れるワークショップや美術展などを県内で展開しています。

さらに、今年度は日比野学長のご提案により、人材育成として、アーティストが美術展の開催に向けて行うリサーチや発想、制作・展示などの一連の流れを、県内の高校生らが学ぶ「瀬戸内海分校プロジェクト」を実施しました。

香川大学の協力の下、8月に、瀬戸内海の文化や歴史、海洋環境などを学ぶ「リサーチ・企画編」を、また、11月～12月に、「作品制作」や「遠隔シアター」の各ワークショップを実施し、アーティストのほか、各分野の専門の先生方からも直接指導を受け、とても有意義なものになったと考えています。

今回の美術展は、このプロジェクトの一環として、「海は人を愛する」をメインテーマに、瀬戸内海とそこに繋がる里の関係を考える「さとみ」をサブテーマとして、三木町指定文化財「池戸公民館」で開催しました。大正ロマンが感じられ、趣のある会場には、建物の窓枠をモチーフとした「灯台」の作品やリサーチで拾った海ゴミを利用した作品が展示され、里と海に想いをはせた現代美術のインスタレーションとなりました。

また、ICT技術を活用して、遠く離れた高松市の海岸と三木町の展示会場を双方向に繋ぎ、高校生らが瀬戸内海を背景に演じるパフォーマンスに、来場者が参加して一緒になって楽しむ「遠隔シアター」も実施し、新たな取組みにも挑戦した美術展となりました。

今後も、東京藝術大学の専門性や芸術的資産を生かした取組みを通じて、本県の文化芸術を担う人づくりや、文化芸術を育む環境づくりに取り組むとともに、「アート県かがわ」の魅力向上や地域の活性化に繋げてまいります。

結びに、本美術展の開催にご尽力いただいた東京藝術大学並びにご協力いただいた香川大学や三木町の皆様方、その他関係者の皆様方に心から感謝申し上げます。

三木町長挨拶

伊藤良春

令和4年度の香川県・東京藝術大学連携事業のアートプロジェクトが、本町で実施されましたことに厚く御礼申し上げます。

本年度より、「海は人を愛する」をメインテーマに新たに「瀬戸内海分校プロジェクト」がスタートし、その第1回目の里と海の間をサブテーマにした「さとみ展」が、本町指定文化財であります池戸公民館を会場に開催されました。

今回展示会場となりました池戸公民館は、明治32（1899）年4月の郡制改正により三木・山田両郡が合併し新たに誕生した木田郡役所として、大正8（1919）年に建設されました。屋根から突き出したドーム（採光用窓）が特徴の県下でも貴重な洋風建築物です。大正12（1923）年郡制廃止後は、郡公会堂、県蚕業試験場、農業試験場三木分場などを経て、昭和58（1983）年に池戸公民館として開館しました。平成24（2012）年にリニューアルされ、現在は郷土資料展示室とアートギャラリーを併設し、個人・団体による作品展示、またサロンコンサートの会場としても活用されています。今回は、「里から海へ海から里へ」両方向へ想いを巡らせながらリサーチしたインスピレーションをもとに、3名のアーティストの独創的な作品が展示されました。また、地元の子どもの調査・フィールドワークをまとめた、リサーチ成果物の展示もありました。海に面していない三木町での開催には、まさに里と海の間が提起されていると考えます。この機会と場を通して、発信する側、受信する側として、双方向からアートを楽しんでいただけたのではないかと思います。新たな瀬戸内海分校プロジェクトの次への第一歩が踏み出せたのではないのでしょうか。

本町は、「やさしく安全な郷土をつくるまちづくり戦略」を「第2期三木町まち・ひと・しごと創生総合戦略」の基本目標のひとつとして取り組んでいます。こころ豊かで文化の香り高いまちづくりの主要施策として、様々な生涯学習施設を効果的に活用し、住民の文化振興及び生きがいづくりに取り組んでいます。今回の池戸公民館での「さとみ展」は、こうした町の施策を進める上で大変意義あるものとなりました。今後も文教の町三木町として、文化・芸術の鑑賞機会を提供し、文化意識の高揚を目指してまいりますので、引き続きのご指導をお願いいたします。

最後になりましたが、「さとみ展」開催にあたりまして、ご尽力いただきました香川県や東京藝術大学、香川大学の皆様をはじめ、ご協力いただきました地域の皆様方に心より感謝し、御礼申し上げます。

東京藝術大学長挨拶

日比野克彦

東京藝術大学は、平成13年度より香川県との連携の下、県民が芸術活動に触れることで地域の人材育成や活性化を図ることを目的に、美術ワークショップや現代アートの展覧会開催などのプロジェクトを、毎年県内各地で展開してきました。

平成30年度には、長年にわたり積み重ねてきた実績を踏まえ、本学と香川県の間で文化芸術振興等を通じた地域社会の発展に向け、連携・協力協定を締結しています。

コロナ禍であった令和3年度は、香川大学の協力の下、善通寺市にてAR（拡張現実）を駆使した展示とリアル展示とが融合した「TOKYO GEIDAI ART FES BY AUGMENTED REALITY IN善通寺」を開催しました。

そして、令和4年度からは新たに香川県・東京藝術大学「瀬戸内海分校プロジェクト」を始動しました。人材育成を目的とする本プロジェクトでは、瀬戸内海の海洋環境を想い、「海は人を愛する」をメインテーマに、毎年サブテーマ（歴史、文化、環境など）を設定し、地域住民が東京藝術大学から選抜された出展アーティストと共に瀬戸内海についてのリサーチ（調査・フィールドワーク）を行い、さまざまな視点から問題を提起し、企画立案、作品制作や展示など展覧会開催に至るまでの一連の流れを、実践を通してアーティストやスタッフから学びます。

第一回となる令和4年度は三木町池戸公民館を展示会場として、里と海の関係性をサブテーマとする「さとみうみ」展を開催し、「里から海へ海から里へ」想いをめぐらせました。

今後も本学の専門性や芸術的資産を活かした県民参加型のパブリック・アート活動を通じて、質の高いアートに親しむ機会を広く提供し、「アート県かがわ」の重要な事業として地域の活性化を図って参ります。

最後になりましたが、香川県や香川大学及び三木町の方々をはじめ、本展覧会開催にご尽力頂いた皆様に心より御礼申し上げます。

Contents

挨拶

香川県知事／三木町長／東京藝術大学長 ————— 2

分校プロジェクト概要説明 ————— 6

伊東五津美

リサーチ・企画編／ワークショップ編／展示編 ————— 12

坂田ゆかり

リサーチ・企画編／ワークショップ編／展示編 ————— 22

鉾井 喬

リサーチ・企画編／ワークショップ編／展示編 ————— 32

寄稿「量より質か、質より量かのランデヴー」——— 42

展覧会情報 ————— 44

東京藝術大学 瀬戸内海分校プロジェクト 第一回 海は人を愛する「さととらうみ」展の概要説明

瀬戸内海分校校長
橋本和幸 (東京藝術大学 教授)

香川県は多くのアーティストを輩出してきました。

猪熊弦一郎氏は県庁の陶壁画「和敬静寂」や丸亀市猪熊弦一郎現代美術館のコレクションを通じて、人々の暮らしと共に芸術があることを現代に伝えていきます。香川県と本学連携の礎を築いた故大藪雅孝氏 (東京藝術大学名誉教授) は、故箕浦昇一 (同大学名誉教授) らとともに、長年、香川県の若者や子供たちに芸術の面白さや素晴らしさを伝えるために絵画ワークショップなどを開催し、芸術家の育成を目指してきました。

これら先人たちの理念を大切にし、東京藝術大学の分校プロジェクトとして「教育と研究」を基にした作品発表を行いたいと考えました。若い世代の育成を念頭に、本学出身で本学の教員を務めるアーティスト3名と、香川県内で公募した地元高校生と、プロジェクトの運営スタッフとして香川大学の学生に協力をお願いしました。単にアーティストが展覧会を行うのではなく、受講生や大学生や地域住民と触れ合いながら共に学び、考え、作品を創りあげる試みが今回のプロジェクトです。

3名のアーティストの選定に際しては、いずれも過去に香川県で作品制作活動を行なった経験のある方々を選抜したことで、より深い学びや発見があると考えました。

香川県の環境や背景を学んだ上で、「海は人を愛する」をメインテーマに、「さととらうみ」をサブテーマとし、以下の3つのフェーズでプロジェクトを進めました。

- リサーチ編 (計6日間の前半は海や里のことを講師の方々から学んでリサーチのきっかけをつかみ、後半はアーティストを中心に3つのチームに分かれてそれぞれリサーチ活動と発表)
- 制作編 (アーティストがそれぞれ参加者を募集し、作品制作ワークショップを開催)
- 展覧会 (作品展示と制作過程の紹介)

初年度プロジェクトは無事に終了し、3名のアーティストがそれぞれ違うアプローチで新たなチャレンジをしていたことが強く印象的に残りました。香川大学の学生たちの強力なバックアップとワークショップに参加してくれた方々の想いがアーティストたちにそうさせていたのではないかと考えます。来年度もプロジェクトは継続します。今回のアーティストたちには更にこの経験や学びを活かし来年度も参加してもらおう予定です。プロジェクトのさらなる飛躍と深化をご期待ください。

Research Introduction

リサーチ編：
イントロダクション

リサーチ編、全6日間のうち前半の3日間半のカリキュラムでは参加者全員を対象に様々な講師によるレクチャーを行いました。その時の様子をダイジェスト写真でお伝えします。



詳細のレポートは、
香川大学の学生による
こちらのブログを
ご覧ください。

DAY 1

8/22 MON | 海と自分の距離

香川大学イノベーションデザイン研究所にて



マインドマップを用いた
自己紹介

講師：
香川大学4年
西口菜々子



伊東五津美
仕事の都合で藝大から
onlineにて自作紹介



坂田ゆかり
演劇プロジェクトの紹介など



鎌井喬
自己紹介の中で風の力を利用した
ピンホールカメラの紹介



海ごみについての基礎知識
講師：
かがわ里海大学 運営委員
森田桂治



ドローイング演習「海の記憶」
講師：
東京藝術大学 教授
橋本和幸



大地の成り立ちからみた
香川の風土
講師：
香川大学 名誉教授
長谷川修一

DAY 2

8/23 TUE | 海と暮らしと



海ごみ現地調査

さぬき市津田、海岸にて

講師：

かがわ里海大学 運営委員 森田桂治



瀬戸内海歴史民俗資料館見学

講師：

瀬戸内海歴史民俗資料館 専門職員 田井静明

DAY 3

8/24 WED | (前編) 海ごみは本当に「ゴミ」なのか？



種は船／船長小屋見学

豊島にて

講師：

TANeFUNe船長 喜多直人

| (後編) 人間だけのものじゃない。生き物のための瀬戸内海

食物連鎖やプランクトンについて
庵治マリンステーションにて

講師：

香川大学 博士研究員 中國正寿



人工漁礁について

庵治マリンステーションにて

講師：

香川大学 創造工学部長 末永慶寛

DAY 4

8/25 THU | 里から海へ響く歌声 ～十三方里、十九町村～



三木町の歴史について

講師：

三木町文化財保護審議会 会長 千葉幸伸

3日半に及ぶ全員でのリサーチは
ここまでで終了し
その後アーティストを中心とした
チームに分かれて作品制作に向けた
リサーチに進みました。

Projects page

東京藝術大学
瀬戸内海分校

さと⇄うみ

里から海を想う時がある。

海から里を想う時がある。

ここではないむこうのことを想像する。

そんな癖がアーティストにはある。

見えない物を想像する癖。

見えていないから想像したくなる。

見えていないから想像することができる。

そんな人たちが互いに互いのことを、

私ではない見えない他者のことをイメージすれば

きっと世界は変わっていくのだろう。

東京藝術大学長 日比野克彦





Research

普段の自身の制作時プロセスを、今回のリサーチワークでどう活かすかを考えた。

場所の変化によって視点が変化することや、リサーチで得た知識を成果物にどのように取り入れていくか。作品が生まれるキッカケのようなものを体験や知識の中から見出し、自分が発見したことや興味を持ったことをどうやって人に伝えていくか。そのプロセスを今回は「新聞」にした。

リサーチでは、自分の住む場所（土地）についてどう捉えているかを改めて探り、「発見」と「疑問」を持ち帰り新聞の題材にしたいと考えた。普段の生活の中で見える風景と、いろんな場所に立った時の視点や感覚の違いを実際に体験し、そこから展開していけるようなフィールドワークを試みた。

屋島の展望台から街を俯瞰して見ると、何が見えて何が見えなくなるのか。長崎の鼻を歩き、海と陸地の境界の岩場から街と海を眺めると何を感じるのか。自分が瞬間的に感じたことや、捉えきれなかったこと、日常の中に埋もれていってしまう感覚の一部を文字やイラストを使って表現する。その新聞を誰かに渡すところも想像しながら、成果物として発表した。

「光を集めるドローイングを描こう」

蛍光塗料で円形のパネルにドローイングをするワークショップ

参加者： 4才～小中高生とその保護者の方々

内容： 「絵でしりとりにしてみよう」と題して導入を行った。

次にオノマトペドローイングをして、イメージを描くためのウォーミングアップをした。

本番に臨むまで、下記の題目で2枚のドローイングを描く。

1枚目：「住んでいる場所について描いてみよう」

・お家、風景、好きなところ、心地良いと思う場所

2枚目：「宝ものについて描いてみよう！」

・気持ち（ワクワク・ドキドキ・そわそわ）

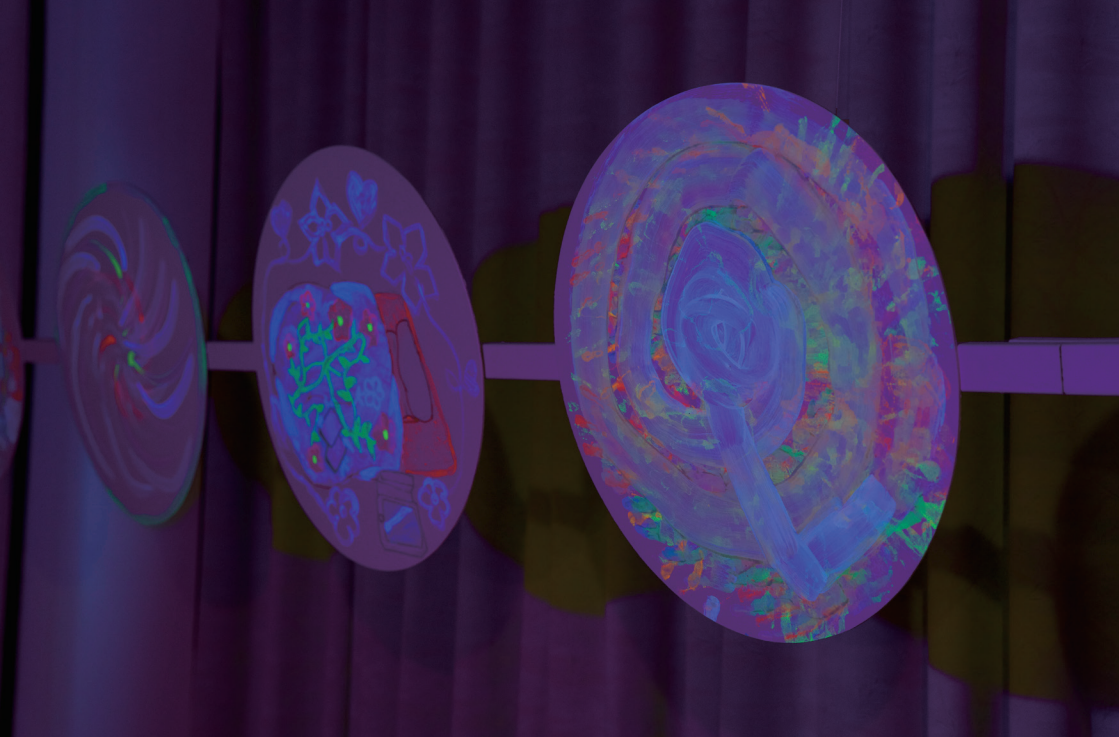
・あなたの宝ものはカタチある？ない？

・さわることができる？できない？

2枚のドローイングを経て、「自分の生活や大切なもの」をテーマに蛍光塗料で円形のパネルに絵を描いた。時々絵にブラックライトを当て、光る様子確かめながら描き進めた。

最後にみんなで鑑賞会を行い、絵に込めたエピソードを発表した。参加者が描いたドローイングは「さとらみ」展会場に展示され、設置された作品の灯台に照らされて光る想定で制作した。





Exhibition

池戸公民館を舞台に、流動的な視点を持った展覧会となった。

3チームとも海に思いを馳せながらも、作品の展開の仕方や表現の違いが現れていて心地良く感じた。

「さとまうみ」展は人との関わり合いの中で徐々にカタチを成していき、展覧会を通して輪郭が現れたように感じる。会期中は地元の人々が行き来し、作品を通して三木町のことや池戸公民館のこと、さらには瀬戸内海について様々な会話が聞こえてきたことを覚えている。

そのキッカケになるような作品を作れたことを、私自身とても嬉しく思う。私のチームの作品は海と陸地（人里）の領域の中間地点にある灯台に着目し、池戸公民館の窓枠や天井をモチーフにオリジナルの池戸灯台を制作した。その灯台が照らす先には、絵の中に描かれた人々の生活がある。タイトルに「燈（ともしび）」とつけて海から街へ、街から海へ光が往来する様子をイメージした。また、展示会場である池戸公民館の空間と共鳴できるような作品を心掛けた。

海の中には大きなうねりがあって

本プロジェクトを通して、たくさんの人にお世話になったことを心から感謝しています。ありがとうございます。

私は海が好きでよく海を見るのですが、瀬戸内海を眺める時いつも不思議に思うことがあります。それは瀬戸内海の表面は銀色でコーティングされたゼリーのように見えるのは何故だろうということです。(私が見ている瀬戸内海はほんの一瞬に過ぎませんが) ある環境や条件が重なってそう見えているのか、それがどのような状況なのか想像が付きません。海の中には潮の流れがあり……、と考え始めると眠れなくなってしまいます。今回のプロジェクトに参加するのを、それくらい楽しみにしていました。これから起こる出来事や会う人、制作も含めてとてもワクワクしていました。

(実際は時間との兼ね合いが難しい部分もありましたが……) 私が普段制作をする時は大抵一人で行う場合が多く、今回のようにチームを組んで話しあったりお互いの反応を見ながら進めていくことで、多くの気づきを得ることができました。夏から冬へ季節の移ろいと共にリサーチと制作ができたのも貴重な機会だと思います。夏と一緒にリサーチしたチームメイトがワークショップに参加してくれて、そこでの繋がりもとても励みになりました。

このプロジェクトの良いところは「継続」だと感じています。今回に留まらず、展覧会の会期が終了した時点で「次はどうしようか」という話し合いができて、反省点を活かし次にやりたい事が鮮明にイメージできました。一人では限界を感じてしまうことも、たくさんの方の協力や意志があれば実現できてしまう。展覧会や制作・ワークショップは何か(例えば経済や人の生活)に対して即効性のあるものではないけれど、時間をかけて物事を突き動かすエネルギーが存在することをこのプロジェクトを通して再認識して行きたいです。



伊東五津美

1988年、千葉県生まれ。2021年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。2022年より同大学、絵画科油画教育研究助手として勤務。美術作家。自身の身体をメディウムとして捉え、場所を移動した先での視点や自然に介入した時の感覚をきっかけに、普段の生活との違いや時間軸の差異をテーマに制作をしている。身体の動きの連続性の中にある形と場所がもつ記憶を可視化すること、作品の生まれる余白に意識を向けた制作を目指している。インスタレーション、立体、写真など多様なメディアを横断しながら作品を発表している。主な展示に、2018年「桃源郷芸術祭」天心記念五浦美術館／茨城、「ぶらまちアート2018 歴史・町広島竹原芸術祭」竹原町並み保存地区／広島、2019年「瀬戸内国際芸術祭2019 秋会期」(公益財団法人 四国民家博物館「四国村」／香川)、2021年「第8回 アラカルト」(船橋市民ギャラリー／千葉)、「芸術の散歩道」(上野公園／東京)、2022年「天空の芸術祭2022」(海野宿／長野県)、「USHIKU REDESIGN PROJECT OPENING」(市原牛久商店街／千葉)





Research

まず、「ロング自己紹介」という方法でチームづくりを行った。県内各地から集まった初対面のメンバー同士が少しでも互いを知るために、3つのお題(①出身地 ②家族 ③将来進みたい道)についてそれぞれ語る。それを聴く人は、話し手が「終わり」と言うまでじっくりと耳を傾け、口を挟まない。そのため、通常の自己紹介よりも長い時間がかかるのだ。話が終わると今度は質問タイムが始まる。相手をもっと知りたくて、様々な質問が飛び交う。1日目はこれだけ。これが最初の、いまここで出会っている自分たち自身の人生についてのリサーチだった。

次に、高松市中央図書館に向かい、海にまつわる民話を収集した。あらすじ、年代、登場する地名などの情報をワークシートに記入しながら、手分けして地域の蔵書を読み漁り、2時間足らずで20以上の民話を集めた。

それらを、香川大学イノベーションデザイン研究所に持ち帰り、2つのグループに分かれて分類・分析した。その方法も、参加者が考え、話し合って決めた。一方のグループは、瀬戸内海近郊の地図をホワイトボードに描き、ロケーションと照らし合わせながらストーリー分析を行った。もう一方は、民話が語られた時間軸(時代)と、登場人物軸(神・人・動物)による4象限を作って分類した。最後に、この一連のワークで得た気づきを発表し合った。

Workshop

11月23日と12月3日の2回にわたり、香川大学イノベーションデザイン研究所と山口県の秋吉台国際芸術村をテレプレゼンスシステム「窓」(提供：MUSVI株式会社)で接続し、遠隔ワークショップを行った。公募により集まった16名は、平日は高校や大学に通う現役学生である。そのため、展覧会会期中の週末に出演できる日程を組み合わせ、3つのチームを構成し、各チームでどんなパフォーマンスをつくることができるか、試行錯誤を始めた。

現代の暮らしの中にあまりにも当たり前根付いている遠隔のコミュニケーションに改めて向き合い、画面越しの会話から問いを立て、実験と検証を繰り返した。離れた場所にいる初対面の人とどんな風に話し始めたらいいのか。何を伝えたくて、何が伝わりづらいのか。テクノロジーを使わないとできないことは何か。学校の部活や塾が終わった後もオンラインミーティングを重ね、私たちの遠隔の議論は続いた。そうして参加者一人ひとりから出てきたアイデアを、実際に声や身体で表現してみることによって3つのパフォーマンス作品が徐々に輪郭を現した。

ひとつは三木町に伝わる「木田郡歌」を歌う遠隔音楽セッション。

ひとつはお客さんと話しながら進行する対話型パフォーマンス。

ひとつは海にまつわる詩から発想したオリジナルの演劇。

実際の海を背景に3チームの作品を上演するために、大の場海岸でも下見やリハーサルを行った。





Exhibition

生命が誕生するずっと前、地球に無数の微惑星がぶつかった。衝突時に発生する水蒸気は大気層を形成し、熱いマグマに包まれた地表を冷やし、雨となって降り注いだ。その雨は1000年ものあいだ降り続き、海が生まれた。つまり、海を作ったのは宇宙だ。

では、里はどうだろう。それは人の手によって創り出される。自然の中に誰かが住み始め、そこで生活を営む他者と出会い、集まり、互に関わり合いながら自分たちの暮らす環境を創造する。これを里と呼ぶならば、「さととうみ」は、分断されつつある人と宇宙の接続を意味するだろう。

こちら側と向こう側、その両方に人がいる。遠く隔たった2地点を双方向通信でつなぐと、そこに小さな劇場が出現する。画面の中に、今この瞬間を生きる相手の姿を見つめるとき、物語が始まる。

演出 坂田ゆかり

香川県の高中生・大学生16名との遠隔ワークショップによって、3つの短いパフォーマンスを制作した。各作品は、週末のみ、三木町池戸公民館（さと）と大的場海岸（うみ）とをリアルタイムの通信で接続し、上演した。強風および雨天・降雪の日は室内で上演を行った。

A: さととうみ遠隔シアター『里から海へ響く歌』

日程 : 2022年12月17日（土）、18日（日）、24日（土）、25日（日）

上演時間 : 5分

作・出演 : 秋田真由香、大下真里奈、奥野唯織、川崎葉月、西口菜々子、藤田若葉、弓場さとか

編曲 : 奥野唯織

B: さととうみ遠隔シアター『ダイアログ』

日程 : 2022年12月17日（土）、24日（土）

上演時間 : 12分

作・出演 : 石田渚、児玉七菜、佐々木日奈望、藤田耀叶、山本心

C: さととうみ遠隔シアター『浜辺のボタン』

日程 : 2022年12月18日（日）、24日（土）、25日（日）

上演時間 : 5分

作 : 佐名彩花、清水空珈

出演 : 佐名彩花、清水空珈、田上奏穂、並木美有

引用 : 中原中也『月夜の浜辺』（1938年『在りし日の歌』より）

テレプレゼンスシステム「窓」を使用

技術協力 : 香川大学 産学連携・知的財産センター長 永冨太一

MUSVI株式会社、株式会社ドコモビジネスソリューションズ

巨大な海との遠隔通話

8月のリサーチ編では、濃密な1週間を過ごしました。藝大を卒業した同世代の作家である伊東五津美さん、鈴木喬さんと初めて一緒に展覧会をつくる機会に恵まれたことはとてもうれしく、大きな刺激を受けました。そして、高校生たちと一緒に多くのことを学びました。歴史と文化、海の生き物のすがた、人間が環境に及ぼす影響、波の音、吹く風の匂い……。行く前に漠然と抱いていた穏やかな海のイメージは打ち砕かれ、混沌とした表情に変わり、到底扱いきれないテーマとして心に刻まれました。

また、このとき出会ったのがテレプレゼンスシステム「窓」でした。離れた相手に気配まで伝える技術として、香川大学はすでにこのシステムを導入し研究に活用されていました。この装置を媒介させることができるなら、インターネットを使いこなすデジタルネイティブ世代のみんなと新しい挑戦ができることを直感しました。「居場所の制約にとらわれない便利で快適なシステムは、芸術作品としても機能してくれるだろうか。」その問いに答えを出すための制作編は、本当に時間との戦いでした。

上演を目前に控え、自然にも翻弄されました。「窓」を海辺に設置して入念にテストを行い、天候を祈るばかりでしたが、いざ本番というオープニングの週末に寒波が直撃し、やむなく室内上演に切り替えました。12月の海のリアルです。翌週、晴天に恵まれ無事にさとらうみをつなぐことができたのは幸運でしたが、来年に向けての課題を痛いほど認識しました。

最後になりましたが、ご尽力いただいた香川大学の永富先生、柴田先生、香川県職員の皆さま、「窓」をご提供くださったMUSVI株式会社の皆さま、香川での通信をフルサポートくださった株式会社ドコモビジネスソリューションズの皆さま、本当にありがとうございました。そして、リサーチとワークショップからこの作品を作り上げた、素晴らしい参加者の一人ひとりに、心から拍手を送りたいと思います。



坂田ゆかり

東京藝術大学音楽環境創造科卒業後、全国の劇場で舞台技術スタッフとして研鑽を積む。2014年、アルカサバ・シアター（パレスチナ）との共同創作『羅生門 | 藪の中』を演出（フェスティバル／トーキョー14）。2016年、建築家ホルヘ・マルティン・ガルシアと8名の高校生と共に制作した『Dear Gullivers』（瀬戸内国際芸術祭2016「複雑なトポグラフィー」展 / 特別名勝栗林公園）は、2018年ロンドンでのアップデートを経て第16回ヴェネチア建築ビエンナーレのスペイン館に参加。同2018年に演出したまちなかパフォーマンス『テラ』（フェスティバル／トーキョー18）が、2020年のパンデミックをきっかけとし、日本・タイ・ミャンマー・インドネシア・ベトナムのアーティストによるアジアの遠隔協働プロジェクト「テラジア | 隔離の時代を旅する演劇」に発展。以来、プロジェクトの企画・運営における中心的な役割を担う。2022年、International Theatre Institute (ITI/UNESCO) の World Theatre Dayにて、日本代表のエマージング・アーティストに選出された。

東京藝術大学
瀬戸内海分校





Research

全体の共通リサーチプログラムの後、私の班ではまず高校生全員に個別インタビューを行った。インタビューという名目だが、その内実は私と高校生との対話を通じて香川のことを教えてもらおうというものだった。里と海を繋ぐというコンセプトから、海や川など「水」に対する幼い頃の記憶というテーマで話を進めた。「幼い頃に防波堤から巨大なエイを見たが家族に信じてもらえなかった」「川に石を並べて対岸まで渡った」「兄妹で毎週釣りに行きたくさんの魚を釣った」「初めて太平洋を見た時水平線が怖く感じた」など、私には経験したことのない感覚や、土地の豊かさを感じる興味深い話が多かった。また、想像していたよりも彼らには自然と向き合った体験が多く、心を揺さぶられた。

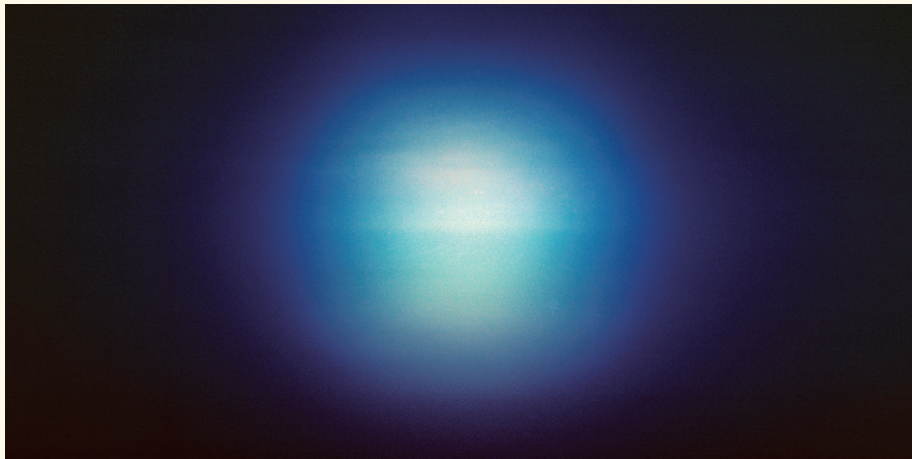
そしてこのインタビューを班で共有し、リサーチを踏まえた作品表現をして香川のことをみんなに教えてほしいというお願いをした。1人1つ作品を制作し、最終日に発表した。全体のリサーチで学んだ、1万年前まで遡る瀬戸内海の歴史から「海は何を思うか」をテーマにした演劇の提案や、船長小屋見学をきっかけに海ゴミストーリーのマンガを描いたり、豊漁の神様「エベスさん」の映画上映を想定したポスター、県外の人にぜひ行ってほしい場所として瀬戸内海が一望できる高台からの風景のイラスト、リサーチ写真をまとめたムービー、リサーチ活動の写真をまとめたポスター、海ゴミをテーマにしたポスターなどを高校生それぞれが制作し、私は風の映像と共に全員のインタビューをまとめた映像を制作した。

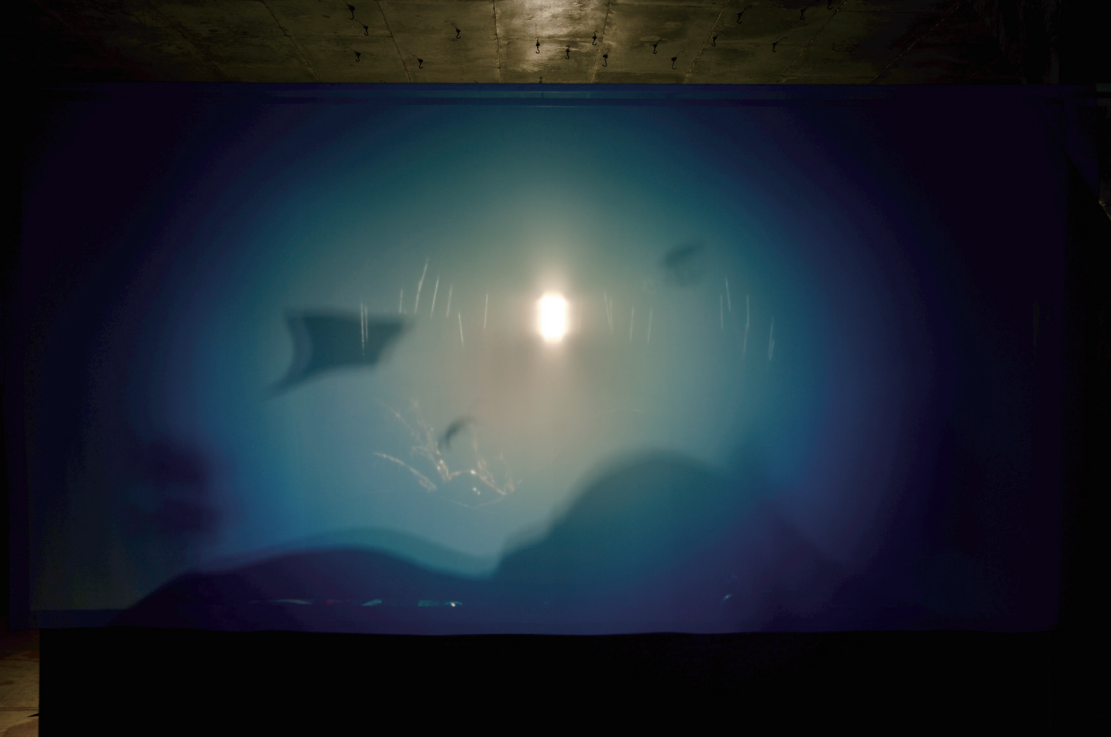
Workshop

リサーチ編を終え、海の中の「見えない世界」に対して強い興味を持った。特にコロナ禍以降、見えない世界、わからない世界を想像することの重要性を感じる。制作ワークショップでは、その見えない海の中を想像し、海ゴミを用いて影絵を作った。里と海は川でつながっているが、里で出たゴミが海ゴミとなっていることも多い。

ワークショップには高松東高校の生徒と香川大生が参加し、海ゴミを切断・加工して土台の上に貼り付ける制作作業を一緒に行った。また海ゴミで作る海の生物のアイデアを参加者から出してもらい作品制作をした。香川県で育った高校生合計4人には、海の良い記憶と悪い記憶を話してもらった対話形式のインタビューを行った。

また、ワークショップではないが制作活動として、川の中と海の中の光を集める写真撮影を行った。これは私が普段制作している風見鶏のような三脚を制作して風上の光をピンホールカメラで捉える写真〈windgraph〉の派生としての新たな試みである。水面直下にカメラが来るように、水に浮き流りに漂う撮影装置を制作した。太陽で光が生まれて地球に届くまでの時間「8分19秒」をかけて1枚の写真を撮影する。その時間、川や海の流りにカメラは漂い、フィルムに集まった川の流れ、海の流れの光が実像として現れる。川と海は何を見てどのように漂っているのか、見えないものを見つめる試みである。撮影は香東川中流と瀬戸内海庵治沖のそれぞれで行った。





Exhibition

池戸公民館の蔵はかつて蚕を保管するという目的で使われていたが、私のチームは自然と人との関係性が深いこの蔵で展示を行うことになった。

蔵に入るとまず大きなスクリーンが目に入るが、これは制作編で撮影した川の光と海の光を集めた写真をそれぞれ布に印刷したものであり、里と海の境界である。このスクリーンにうっすらと海の風景と生物が影絵として浮かび上がる。海の外側から見た幻想的な海の世界が映し出されている。そして家族と海に行った記憶や幼い頃海で釣りをした話など高校生が話す海のよい思い出が音声として流れている。

しかしスクリーンからさらに奥に進み、海の内側の薄暗い空間に入ると、そこは無数の海ゴミで埋め尽くされている。幻想的な影絵を構成していた物体が海ゴミであることがわかる。ただ海ゴミだけでなく流木や枯れた草なども混ざり、海ゴミで作られた生物も漂っている。入り口付近の海のよい記憶の音声と交互に、「海で漁師だった祖父を亡くした」「海に潜った時濁りで上下がわからなくなり恐怖を感じた」など海の悪い記憶の音声が流れている。

リサーチで遊漁船に乗った際に、船長が「海は怖い」と言っていたことが気になった。船長でさえも見えない海の中は怖いと感じることはどういうことなのだろうか。海の美しい一面だけでなく見えない一面を想像すること、そして見える世界と見えない世界の二面性を考えることは大切だ。美しさと怖さ、生命とゴミ問題、里と海、これらの自然と人間の関係に思いを馳せる。

教え、教わり、混ざり合うこと

今回、初めての瀬戸内海分校プロジェクトの実施でしたが、普段1人で制作活動をしている私にとって、高校生と一緒に活動する体験は様々な気づきを与えてくれました。

私は東京と福島の2拠点居住をしていますが、地方の人から「東京の方が優れている」という話を聞くことが多々あります。しかしコミュニケーションをとっていくと、地方の方が自分の土地に対しての愛が強く、また豊かな文化や生活があって、誇りを持って生活をしていると感じていました。

そこで最初のリサーチ編では、高校生に「香川のことを教えてもらう」ということをテーマに活動を行いました。私は映画制作もしていますが、一般論よりも個人の記憶や思い出こそ共感の重要な要素だと考えています。インタビューはリサーチ編、制作編と行いましたが、予想以上に高校生が自然や人間関係を感じ取りながら豊かな体験をしていると感じました。そのひとつ一つの要素が一般論では語れない香川の姿だと思います。また高校生が語る言葉には、鮮明な幼少期の描写や脚色のない言葉による強度がありました。

この興味深い体験を展示作品に取り込みたいと思い、インスタレーションに音声インタビューも加えました。これは私にとっては初めての経験で、1人で制作しては至らなかつた変化だと思います。

このように、普段教えている人間が逆に「教わる」ということで新たな関係性が構築されるのだと思います。一方的な関係よりも双方向に情報交換や意見が語れることにより、新たなものが生まれることを体感しました。それは東京と地方の関係性も一緒だと思います。探検家で文化人類学者の関野吉晴さんの言葉で、「風の人と土の人が混ざり合う時に『風土』が生まれる」という話があります。我々アーティストは風の人として各地を巡りますが、そこで今回のように地元の高中生と関わることは、新たな風土、文化ができるきっかけになると可能性を感じました。次の瀬戸内海分校の実施が楽しみです。



銚井喬

1984年神奈川県生まれ。2010年東京藝術大学大学院美術研究科修了。2016年から同大学デザイン科立体工房非常勤講師。学生時代鳥人間コンテストに参加しパイロットとして空を飛び、わずかな風に翻弄された経験から風を可視化する作品を作り始める。一方で2010年NHKにカメラマンとして就職し福島局配属となり、東日本大震災の際は仙台平野を襲う津波をヘリコプターから空撮中継。福島県内にて津波被害、原発事故の取材を続ける。これらの経験からエネルギーと自然の関係性を問うことを、風をメタファーに様々な視点から試みている。自然の中に生かされていること、そしてエネルギーの存在に感謝をしながら表現と向き合いたいと考える。自然と人間社会を二分するのではなく、双方を行き来しながら多面的な価値観を持ち得た、動的な問いかけを試みている。2016年映画「福島桜紀行」発表、かがわ・山なみ芸術祭（香川県）、2018年六甲ミーツアート（兵庫県）、2020年Vermont Studio Center Artist in Residence (USA)、SIM Artist in Residence Program (Iceland)、2021年野村財団芸術文化助成、HIBIYA BLOSSOM 2021（東京ミッドタウン日比谷）、中之条ビエンナーレ（群馬県）など。国内外のアーティストインレジデンスに参加、リサーチベースのサイトスペシフィックな作品を発表している。



量より質か、質より量かのランデヴー

—文化事業におけるKPIの未来—

瀬戸内海分校 教頭

柴田悠基（香川大学 創造工学部 講師）

2017年に文化芸術基本法〔1〕が改正され、地方自治体における文化事業は文化芸術の振興にとどまらず、観光、まちづくり、国際交流などの関連分野における施策を取り込む動きが推進された。これを踏まえ、香川県は文化振興計画（平成30年～平成34年）〔2〕にて、文化芸術による恩恵をまち全体の魅力向上に結び付けるための取り組みを行うことにより、少子化・高齢化などの地域課題にアプローチしていく趣旨の説明がなされている。瀬戸内国際芸術祭、さぬき映画祭などの文化事業がそれにあたり、瀬戸内海分校プロジェクトもそのひとつとして位置付けられている。

お堅い前置きはここまでとしながら、それに触れなければならない重要なポイントは地方自治体の文化事業がどのような目的で実施されているかを把握しなければならない点である。さらに進めると、当事者となるアーティストはその目的からどのように事業が評価されるかを自覚しなければならないということである。

地方自治体の出資で運営されるアートプロジェクトの評価とは何だろうか。藤田〔3〕や熊倉〔4〕によると、アーティストによるプロジェクトの評価は、作品の美術的文脈によるクオリティを前提として、共創過程による地域の方々の考え方の変化など、「過程」を重視した制作活動であることが一般的であるとされている。一方、地方自治体では、来場者や経済指標による数値を扱った評価となっており、瀬戸内国際芸術祭総括報告書〔5〕を例に挙げると、16項目

中15項目がその対象となっている。

文化事業の評価についての在り方は、文化庁と九州大学共同研究チームにより作成された「評価から見る“社会包摂×文化芸術”ハンドブック」〔6〕でも言及されている。それによると、アーティストの視点では、「(質としての) 評価は目的ではなく手段であり、コミュニケーションの場となり得る本質的に創造的な行為」である一方で、「地方自治体はそれら質の評価は事業の一部であるが、主に参加人数やアンケートによる満足度の調査などアウトプット評価に依存している」と述べられている。

昨今の地方自治体はKPI（重要業績評価指標）によって、事業評価を行うことが必須とされ、文化事業においても量的評価を扱わなければならない状況である。それに対してプロジェクトの現場では制作過程についての質的评价が求められていることが分かる。どちらも大切な評価であり、両者から歩み寄った新たな評価手法によってアートプロジェクトの芸術的・社会的価値を定量化できることができないだろうか。

量も質も重要。さて、どうする？

瀬戸内海分校プロジェクトでは、現場での質的评价を地方自治体の量的評価軸として扱うことができるかについての研究〔7〕が並行して行われた。研究概要は、本プロジェクト参加者のテーマ「さと⇄み」に対しての考え方が、参加前後において変化したかの度合いを数値として測定する変換モデルを作成するものである。また、その数値を自治体の事業評価KPIとして

扱うに足るか、客観性と有効性を検証することを目的とした。

具体的には、プロジェクトの前後に参加者がテーマに関するマインドマップを作成し、そのマインドマップの参加前後の変化量を数値化する。それにより、事業の質的评价を量的に変換、その有効性を検証するものである。マインドマップは思考を整理するものとして活用される思考術であり、アートプロジェクトにおいて、参加者の特性把握やプロジェクト終了後の振り返りに活用できるものである。これにより、プロジェクト運営を阻害せず、KPIとして扱える数値を取得することができれば、双方において有効な手段となりうるのではと仮説を立てた。研究の詳細はここで述べないが、「プロジェクトを通して得られた参加者の視野の広がり」を「多角的思考力」としてマインドマップから数値化できることが確認され、今後はその数値の有効性や妥当性を検証することになっている。

アーティストとしての先生

瀬戸内海分校プロジェクトは、これまでの活動を見直し、2022年度から高校生と共に学び制作を行う「共創による過程」が重視されるプロジェクトになった。アーティストは生徒と同じ目線でテーマを学習し、時には先生となり視野の広さを示すことが求められている。本プロジェクトの継続によって、アーティストはアーティストとして振る舞うだけでなく地域の若手を育成する先生になることができれば、多様化する社会において新たな社会価値を創造する想像

力豊かな地域の若手育成に貢献することができるようになるだろう。また、質的评价を量的評価として扱える評価手法が整えば、地方自治体においてアーティストが地域に貢献する度合いを示すことができ、芸術文化の社会的意義をより多くの方々に認識していただける未来が来るかもしれない。

瀬戸内海分校プロジェクト初年度となった今回は、共に学び成長する視点では至らぬ点が多かった。次年度以降、共創プログラムを見直し、文化芸術の振興により地域課題解決に資する若い世代の育成に貢献していきたい。

〔1〕文化芸術基本法

https://www.bunka.go.jp/scisaku/bunka_gyosei/shokan_horci/kihon/geijutsu_shinko/

（2023年2月19日参照）

〔2〕香川県文化芸術振興計画（平成30年～平成34年度）

<https://www.pref.kagawa.lg.jp/bunka/keikaku/wbfemu180529111952.html>

（2023年2月19日参照）

〔3〕「地域アート」（2016、藤田直哉ほか、堀之内出版）

〔4〕「アートプロジェクト（芸術と共創する社会）」（2014、熊倉純子ほか、水曜社）

〔5〕「瀬戸内国際芸術祭2010総括報告」（2010、瀬戸内国際芸術祭実行委員会）

〔6〕「評価から見る“社会包摂×文化芸術”ハンドブック」（2020、文化庁×九州大学共同研究チーム）

〔7〕「マインドマップを用いたルーブリック評価による文化事業の事業評価手法の検討」（2023、西口菜々子、柴田悠基 香川大学創造工学部卒業研究論文）

企画概要と実績

展覧会概要

展覧会名	2022年度香川県・東京藝術大学連携事業 瀬戸内海分校プロジェクト 第1回 海は人を愛する「さとろうみ」展		
主催	香川県 東京藝術大学		
特別協力	香川大学		
協力	三木町		
総合監修	東京藝術大学 学長 日比野克彦		
会期	リサーチ・企画編	2022年8月22日(月)～27日(土)	
	ワークショップ編	伊東五津美 2022年12月4日(日)	
		坂田ゆかり 2022年11月23日(水)、12月3日(土)	
		鈴木喬 2022年12月4日(日)	
		「さとろうみ」展	2022年12月16日(金)～12月25日(日)

ウェブサイト <https://www.tua-kagawa.com/>

ポスター・チラシデザイン いいつかしょうこ

リサーチ・企画編概要

参加者：県内高校生19名、香川大学生6名（運営補助）

	[内容]	[日程・場所]	[講師]
1日目	①里海大学レクチャー ②ドローイング ③香川大学レクチャー	8月22日(月) 9:00～17:00 香川大学イノベーションデザイン研究所	①森田桂治 ②橋本和幸 ③長谷川修一
2日目	①海ごみ拾い ②瀬戸内海歴史民俗資料館見学	8月23日(火) 9:00～16:45 さぬき市海岸 瀬戸内海歴史民俗資料館	①森田桂治 ②田井静明
3日目	①瀬戸芸日比野学長作品見学(豊島) ②香川大学レクチャー ③人工魚礁見学	8月24日(水) 9:00～15:15 豊島 庵治マリンステーション	①喜多直人 ②末永慶寛・中国正寿 ③末永慶寛
4日目	①三木町歴史レクチャー ②チーム活動	8月25日(木) 9:00～16:05 三木町池戸公民館	①千葉幸伸 ②伊東五津美・坂田ゆかり 鈴木喬
5日目	チーム活動	8月26日(金) 9:00～17:00 [坂田チーム・鈴木チーム] 香川大学イノベーションデザイン研究所 高松市中央図書館 [伊東チーム] 屋島周辺	伊東五津美 坂田ゆかり 鈴木喬
6日目	①チーム活動 ②日比野学長講評	8月27日(土) 9:00～16:30 香川大学イノベーションデザイン研究所	①伊東五津美・坂田ゆかり 鈴木喬 ②日比野克彦

ワークショップ参加者数

[アーティスト名]	[テーマ]	[日程・場所]	[参加人数]
伊東五津美	光を集めるドローイングを描こう	12月4日(日) 9:00～16:00 池戸公民館	13
鈴木喬	切って貼って影絵を作ろう・海を話す	12月4日(日) 9:00～16:00 池戸商工センター	5
坂田ゆかり	さとろうみ遠隔シアター	11月23日(水・祝) 12月3日(土) 12:00～17:00 香川大学イノベーションデザイン研究所	16 ／合計：34人

さとろうみ遠隔シアター 上演時間

[日付]	[時間]	[上演場所]	[内容]
12月17日(土)	9:00～10:00	池戸公民館	里から海へ響く歌(海との音楽セッション) ※公開リハーサル
	13:00～16:00	池戸公民館	里から海へ響く歌(海との音楽セッション) ※ライブ演奏
	13:00～16:00	香川大学 イノベーションデザイン研究所	ダイアログ(海との通信対話劇)
12月18日(日)	14:00～15:00	香川大学 イノベーションデザイン研究所	浜辺のボタン (海をテーマにした高校生による創作劇)
	15:00～16:00	香川大学 イノベーションデザイン研究所	里から海へ響く歌(海との音楽セッション)
12月24日(土)	11:00～11:45	大の場海岸	浜辺のボタン (海をテーマにした高校生による創作劇)
	11:50～12:35	大の場海岸	里から海へ響く歌(海との音楽セッション)
	12:40～13:30	大の場海岸	ダイアログ(海との通信対話劇)
12月25日(日)	13:00～13:45	大の場海岸	浜辺のボタン (海をテーマにした高校生による創作劇)
	13:50～14:30	大の場海岸	里から海へ響く歌(海との音楽セッション)

※上記タイムスケジュールの中で、池戸公民館の来場者に合わせて随時上演

※12月17日(土)、18日(日)は悪天候のため、池戸公民館及び香川大学イノベーションデザイン研究所で上演した。

「さとろうみ」展 展覧会来場者数

12月16日(金)	56	12月23日(金)	62
12月17日(土)	79	12月24日(土)	58
12月18日(日)	99	12月25日(日)	80
12月19日(月)	25		
12月20日(火)	15		
12月21日(水)	31		
12月22日(木)	26	／合計：531人	

ウェブサイト訪問者数

2022年 6月	63	2023年 1月	200
7月	183	2月	214
8月	674	3月	59
9月	524		
10月	378		
11月	560		
12月	684	／合計：3,539人	

関係者一覧

自治体関係者

香川県	政策部文化芸術局	知事 局長 次長 課長 副課長 課長補佐 副主幹 副主幹 主事 主事 主事 課長 課長補佐	池田豊人 小川剛 宮崎達朗 山本知子 土居義昌 中本和美 矢田貴美代 久保政昭 藤樫美冴 松内理紗 高尾日菜 八木真澄 塩津利幸 松家実由 横手誠 古市かおり 佐々木周二 本田真由美
	政策部文化芸術局文化振興課		
三木町	生涯学習課		
	池戸商工センター	所長	

東京藝術大学

総合監修 事業代表者 企画・運営・講師 出展アーティスト	美術学部 美術学部デザイン科 美術学部絵画科油画専攻 社会連携センター 美術学部デザイン科	学長 学部長 教授 教育研究助手 特任助教 テクニカルインストラクター	日比野克彦 光井涉 橋本和幸 伊東五津美 坂田ゆかり 鈴木喬
事務局	美術学部 美術学部国際連携係	事務長 係長	金井島伸志 松村英恵 柴田禎子 栗脇美緒 金濱陽子

香川大学

特別講師 技術協力 企画・制作・設営及び 展覧会全体の運営	創造工学部 産学連携・知的財産センター 創造工学部 造形・メディアデザインコース	学長 学部長・教授 センター長・准教授 講師 学生	寛善行 末永慶寛 永富太一 柴田悠基 西口菜々子 奥野唯織 川崎葉月 篠崎妃那 児玉七菜 弓場さとか 藤田若葉 大下真里奈 石田渚
--	--	---------------------------------------	---

リサーチ・企画編 関係者

講師	かがわ里海大学 香川大学 TANeFUNe船長／アーティスト 香川大学 三木町文化財保護審議会／三木町文化財保護協会 瀬戸内海歴史民俗資料館 瀬戸内海歴史民俗資料館	運営委員 特任教授・名誉教授	森田桂治 長谷川修一 喜多直人 中國正寿 千葉幸伸 松岡明子 田井静明 栗田咲来 今村友香 松本風馬 大西暁生 梶森乃愛 原さくら 北岡結 滝翔 白井くるみ 佐々木日奈望 秋田真由香 清水空珈 森本采夏 高田由芽 藤田ひかる 松原萌 佐久間匠 藤田央玖斗 須永来怜亜
香川県内参加高校生		農学部 博士研究員 会長 館長 専門職員 伊東チーム	
		坂田チーム	
		鈴木チーム	

技術協力

MUSVI株式会社	代表取締役 執行役員 四国支社ソリューション 営業部門	阪井祐介 田村吉弘 藤本健太 藤田然吏 石川生強 溝口舜 野村周 下元鉄兵 宮城萌
株式会社ドコモビジネスソリューションズ		
香川フィッシングサービス		

2022年度香川県・東京藝術大学連携事業

瀬戸内海分校プロジェクト 第1回

海は人を愛する「さととらうみ」展 Project Archive

[編集] 渡辺龍彦 (遊と暇)

[デザイン] いしつかしょうこ

[写真撮影] 鉦井喬、香川大学学生

[印刷] 株式会社ムレコミュニケーションズ

[発行] 東京藝術大学 美術学部

[発行日] 2023年3月末日



TOKYO
GEIDAI



香川大学



© Tokyo University of the Arts 2023



「さととらうみ」展 ウェブサイト

<https://www.tua-kagawa.com/>

